

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって

——寒巖義尹、鉄山士安、東州至遼——

木 村 文 輝

一、如来寺に残る木像彫刻

熊本県宇土市岩古曾町（旧宇土郡古保里荘上古閑村）にある三日山如来寺は、寒巖義尹（一二二七—一三〇〇）、以下「義尹」と略す）が一二六〇年代に開いた九州最古の曹洞宗寺院である。義尹は後鳥羽天皇、もしくは順徳天皇の皇子として生まれたが、やがて出家して比叡山に登り、天台教学を学んだ。その後、仁治二年（一二四一）に道元の門に参じ、それ以降は曹洞宗教団の一員として活躍した。また、彼は二度にわたって入宋し、帰国後は九州に活躍の場を求めるとともに、様々な形で宋文化の導入を目指したことが窺われる^①。

〔熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）〕

当初の如来寺は、現在の宇土市花園町三日地区（旧古保里荘三日村）に位置し、七堂伽藍を備えた大寺院であった。しかし、義尹は弘安元年（一二七八）に現在の熊本市南区川尻地区（旧河尻荘）で緑川に大渡橋の架設に成功すると、弘安六年（一二八三）にはその近くに大梁山大慈寺を開き、そこに活動の拠点を移した。さらに、同寺は正応元年（一二八八）に後深草上皇の勅許を得て曹洞宗最初の勅願寺院となり、永仁二年（一二九四）には紫衣勅許の寺格を認められた。けれども、義尹は永仁六年（一二九八）に大慈寺の住職を退くと如来寺に戻り、正安二年（一三〇〇）八月二日に同寺で示寂したようである。

義尹の在世中、如来寺は大慈寺のように朝廷や幕府から

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

の恩裁を受けていなかった。けれども、徳治二年（一三〇七）に鎌倉幕府の命によって祈祷所とされると、続く室町幕府からも庇護を受け、貞和三年（一三四七）には「肥後国利生塔」の通号を授かった。⁽³⁾これは、南北朝の動乱の中で、北朝方がこの地域の支配権拡大を目指したためである。⁽⁴⁾しかし、正平十一年（一三五六）には如来寺周辺の地は政治的な重要性を失い、それ以後、如来寺は次第に衰退したようである。⁽⁵⁾そして、永正元年（一五〇四）に現在地へ移転した。⁽⁶⁾さらに、天正十六年（一五八八）に宇土が小西行長領になると、如来寺は他の寺社と同じく大きく退転した。慶長五年（一六〇〇）に肥後全土が加藤清正領になってから、如来寺は一字を再興したとのことである。⁽⁷⁾現在、同寺には常住する僧侶もおらず、本堂も公民館を兼ねた質素な建物という状況である。

けれども、同寺には今も合計十三点の木像彫刻が残されており、往時の繁栄の一端を伝えている。それらを具体的に示せば、本堂に安置されている本尊の釈迦、阿弥陀、薬師の三如来像、開山の寒巖義尹、開基の素妙尼、大慈寺十四世の東州至遼の三体の頂相彫刻、韋駄天像と狛犬像、そ

れに本堂の向かって左側にある五柱宮に祀られている五体の男神倚像である。

これらの中で、本尊の三如来像に関しては、既に多くの論考がなされており、如来寺草創期のものであることがほぼ確定されている。⁽⁸⁾ただし、釈迦如来像からは胎内銘が見されており、それが如来寺草創の由来をめぐる新たな問題を提起している。

義尹の頂相彫刻は、大慈寺に安置されている頂相よりも多少小ぶりだが、よく似たものである。寛文九年（一六六九）に北嶋雪山が著した『國郡一統志』の中で、この像は「上人自作ノ頂相、每刀三拝ヲ成ス」と記されており、天明四年（一七八四）の序を持つ寺本直廉『古今肥後見聞雜記』にも「自作也と云り」とある。⁽⁹⁾しかし、昭和五七年度に熊本県立美術館が行った調査によれば、両寺の像はいずれも南北朝時代の作と推定されている。⁽¹⁰⁾ただし、大慈寺の頂相は天文九年（一五四〇）に兵火のために頭部を除いて焼失し、体部は天文十一年（一五四二）の補作である。⁽¹¹⁾それ故、頂相の全体像としては、如来寺の作例の方が古いことになるだろう。

素妙尼像は南北朝時代の作と推定されており、東州至遼像は胎内銘から応永七年（一四〇〇）に造られたことが明らかである。いずれの像も総高一一〇センチ以上、像高七五センチ前後であり、義尹像に比べるとやや小ぶりながらも、ほぼ同じ大きさである。¹⁴ただし、結論から述べれば、素妙尼像の真の像主は素妙尼ではなく、如来寺二世の鉄山士安であろうと私は考えている。この点については、後に改めて論ずることにしたい。

その他の彫刻に関して、まず韋駄天像と狛犬像はそれぞれ桃山時代と室町時代末期の作と推定されている。¹⁵この中の韋駄天像については、『古今肥後見聞雜記』の中で「寺僧云是も寒巖之作と云」と記されているが、¹⁶作風からみて、その記述に従うことは不可能である。また、五体の男神倚像は室町時代の作と推定されており、¹⁷中世における貴重な伽藍神像だと思われる。鎌倉の建長寺や寿福寺等に残されている伽藍神像に比べると素朴な印象ではあるが、¹⁸五体が一組になつている点からも興味深い作例と言えよう。

ただし、本稿はこれらの木像彫刻に関して、美術史的な視点からの考察を行うものではない。そうではなくて、同

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）



如来寺に残る三体の頂相彫刻
左から、東州至遼像、寒巖義尹像、伝・素妙尼像

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

寺に安置されている三体の頂相の像主が、それぞれ如来寺の歴史の中でどのような役割を果たしたのか、あるいは、どのような関わりを持っていたのかを検討することを目的としている。言うまでもなく、義尹は同寺の開山である。しかし、先述のとおり、本尊の釈迦如来像の胎内銘は義尹の如来寺草創に関して幾つかの問題を提起している。また、鉄山土安や東州至遠と如来寺との関わりについては、これまでほとんど論じられていない。そこで、極めて限られた資料しかないけれども、上記の問題に対して何らかの回答の可能性を探ってみることにしたい。

二、義尹による如来寺の草創

(一)「如来院」と「如来寺」

『國郡一統志』をはじめとする種々の記録の中で、如来寺は文永六年(一二六九)に、素妙尼の招請を請けた義尹によって開かれたと記されている。ところが、本尊の釈迦如来像の解体調査を行った際に、胎内の胸部に内割がなされており、そこに舍利容器が納められるとともに、その内割を塞ぐための蓋板がはめられているのが発見された。そ

して、その蓋板の表裏には、それぞれ義尹の直筆と思われる文字で、「如来院本尊／釋迦如来／正元二年〈庚申〉正月十日建立／同二月九日収之／開山住持比丘義尹／同開山尼修寧」、「正元二年〈庚申〉正月十日／建立／如来院本尊釋迦如来／同二月九日収之／開山比丘義尹／蜜壇尼修寧」¹⁹と記されていた。

この銘文で注目されるのは次の四点である。すなわち、「如来寺」と「如来院」という名前の相違、従来「如来寺」の開山年とされてきた文永六年より九年も早い正元二年(一二六〇)に「如来院」が存在したこと、義尹が「如来院」の開山とされていること、それに、修寧という未知の尼僧の存在と「蜜壇尼」という肩書である。

まず、二つの名前の相違は、「如来院」を「如来寺」の前身とみなすか否かという問題と、「如来院」の「開山比丘義尹」を寒巖義尹と同一視してよいかという問題を引き起こした。しかし、わずか十年ほどの間に、一つの土地に「如来」を名乗る二つの寺院が開かれ、その開山がいずれも「義尹」であること、さらには「如来院」の本尊が「如来寺」に伝来されたことを偶然の一致と考えることは難し

いだろう。つまり、「如来院」を「如来寺」の前身と考えるのが自然である。

そうになると、「如来院」は既に正元二年に存在したことになる。義尹は建長六年（一二五四）頃に一回目の入宋から帰国し、文永元年（一二六四）頃に二回目の入宋を果たしているため、同寺の開創はその間の出来事ということになる。そこで注目したいのが、文永六年の如来寺開創を伝える義尹の伝記の記事である。例えば、館隆志氏が現存最古の義尹の伝記と推定している『肥後州大慈寺開山寒巖禅師略伝』⁽²¹⁾と、年代の判明している最古の伝記である『國郡一統志』の「大梁山大慈寺」の項の記載を見ると、前者には「且ク博多聖福禅寺ニ住ス。繼デ肥之後州ニ住ス。小保里郷ニ潜居ス。一衣一鉢。世外之業有リ。偶郷人素妙禅尼之請ニ応ジテ如来寺第一座祖ト為ス」とあり、後者には「聖福禅寺ニ三年留住ス。繼デ肥後州ニ徒シ小保里郷ニ居ス。素妙尼之請ニ隨ヒ大永六年己巳朔三日山如来寺七堂伽藍大成シ、仏殿ニ三如来ヲ安置ス」と記されている。

義尹が二回目の入宋から帰国したのは文永四年（一二六

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

七）と考えられているため、博多聖福寺に三年間留まった後に肥後に移ったとすれば、それは文永六年のことである。それ故、彼の肥後移住と素妙尼の招請による如来寺の開創は同年の出来事ということになるだろう。しかし、先の引用文をよく見ると、いずれの記述も義尹は素妙尼の招請によって古保里郷に來たのではなく、それ以前に小保里郷に居住していたことを示唆するように思われる。⁽²²⁾つまり、素妙尼の招請による如来寺開創以前から、古保里郷には義尹の居住する場所があったことになる。それが、正元二年に修寧尼とともに釈迦如来像を安置した「如来院」であり、宋から帰国後の義尹が「一衣一鉢」の生活を送るのに不自由のない程度のものであったのではないだろうか。⁽²³⁾そして、素妙尼の招請による「如来寺」の開創とは、『國郡一統志』の記述に従えば、七堂伽藍の整備と三如来像の安置による一大寺院の造営ということになるかもしれない。そのように考えれば、義尹の二度目の入宋をはさんで行われた「如来院」の開創と「如来寺」の開創は、それぞれ異なる意味をもっていたことになるであろう。⁽²⁴⁾

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

(二) 蜜壇尼修寧

では、義尹とともに「如来院」の開山とされている修寧尼は何者か。この問題をめぐっては、釈迦如来像の胎内銘が発見されて以来、修寧尼と素妙尼との関係が関心を集めてきた。当初、釈迦如来像の胎内銘の存在を初めて報告した高木恭二氏は「おそらく別人と考えられる」と述べていたが、その後、両者を同一視する見解も登場した。⁽²⁷⁾しかし、わが国では既に奈良時代から国分尼寺の制度が実施されておき、各地に尼僧が存在したとしても不思議ではない。また、義尹と関わりのある尼僧の中で、個人名が判明しているだけでも、修寧尼、素妙尼をはじめ、法位、修惠、成道、成阿、専信の七人が確認されている。⁽²⁸⁾つまり、如来寺の開創にあたっては、二人の尼僧が関与したことを特に疑問視する必要はないであろう。

とは言え、他に資料がない以上、修寧尼の出自を探ることとは不可能である。では、そこに付されている「蜜壇尼」という肩書は何を意味しているのか。この点に関して、高木氏が「その人は蜜壇尼という名称がつけられ、密教にかかわる尼僧であったと考えてよからう」と記して以来、こ

の説がほぼ踏襲されているように思われる。同氏はその根拠を示していないが、おそらく古保里郷には如来寺の開創以前から「既に天台系寺院が存在していたと思われる」⁽³¹⁾ことが念頭にあったのではないだろうか。⁽³²⁾

さらに上田純一氏は、「同(引用者注、釈迦)如来像胎内からは舍利容器などと共に朱書紙本一枚の真言書なども発見されており、かつ、「蜜壇尼修寧」の署名が存する」となどから考えて、古くは密教系の寺であったと思われる⁽³³⁾と述べ、「如来寺の前身が「蜜壇尼修寧」を檀那とする密教寺院であった」と推定している。たしかに、上田氏が指摘するように、義尹が大渡橋の「供養において「三時法華懺法」を修していることや「五部大乘妙典」を転読していること、義尹自身が天台僧としての経歴を有する事実等」から、「彼の禪に占める密教の位置の高さ」を否定することはできないだろう。⁽³⁵⁾また、かつて古保里郷に存在した報恩寺に伝わる十一面観音菩薩像の胎内には、義尹と修寧の署名とともに、十一面観音を表す梵字や、胎蔵界と金剛界のそれぞれの大日如来を表す梵字が繰り返し記されていることが報告されており、この点からも義尹の禅風に

密教的な色彩が強いことは確認されるであろう。

しかし、たとえそうだとしても、修寧尼を密教の尼僧とみなし、「如来寺の前身」を「密教寺院」と考えることは性急にすぎないだろうか。義尹の師事した道元が「正伝の仏法」の立場から、密教的要素を排除した禅風を宣揚したことは確かである。しかし、当時の禅宗一般の傾向から見れば「密禅併修」こそが主流であり、道元の立場は例外的であった。このことは、わが国に禅宗を伝えた栄西が、当時は禅僧としてよりも密教僧として著名であったことから窺われる。また、道元教団においても、永平寺二世の孤雲懷莽（以下「懷莽」と記す）や三世の徹通義价（以下「義价」と記す）をはじめとして、道元の示寂後に教団運営を担ったのは密教的色彩の強い達磨宗の系譜に連なる人々であり、義尹もこの達磨宗に関わりを持っていった可能性がある³⁷⁾。さらに、義价の弟子で總持寺を開いた瑩山紹瑾は密教的な修法を積極的に取り入れたことで知られており、そのことが、後に曹洞宗の教線を飛躍的に拡大させる要因になった。このように、曹洞宗教団においてさえ、密禅併修の傾向は一般化していくのであり、義尹の禅風に密

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

教的な色彩が強いことをあえて特別視する必要はない。

そして、別の観点から考えれば、そもそも道元門下の義尹とともに一寺院の「開山」となる尼僧が、あえて自らのことを密教僧だと宣言するような署名を行い、義尹自身も密教寺院の開山となることがあり得るであろうか。むしろ、「蜜壇尼」という言葉は、密教とは別の意味を表していると考えた方がいいように私には思われる。あくまで仮説にすぎないが、「蜜壇尼」の「蜜」を「波羅蜜」の「ミツ」、「壇」を「檀那」の「ダン」と理解することはできないだろうか。「波羅蜜」は「完全であること」を表し、「檀那」は布施の寄進者を意味する。そして、「壇尼」とは、この「檀那」に相当する者が尼僧であることを表す。つまり、「蜜壇尼」とは大きな寄進を行った尼僧という意味で、如来院の「開基尼」であることを示しているという解釈である。あるいは、既に修寧尼が在地の寺院の住職を務めており、その寺院を義尹に譲ったと考えることもできるだろう。このことは、後に触れる如来寺二世の鉄山土安が著した上書の中に、同寺は義尹が「国中之靈場ヲ尋ね、最初之禅院ヲ闢⁴⁰⁾いた所だと記していることから窺われ

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

る。そうだとすれば、その「霊場」が古い天台宗系の寺院であったことは十分に考えられることである。

（三）如来寺本尊の三如来像

ともあれ、義尹と修寧尼がともに「開山」となって開かれた「如来院」に安置されたのが、胎内銘の発見された釈迦如来像である。ここで改めて注目したいのが、先に引用した「素妙尼之請ニ隨ヒ大永六年己巳朔三日山如来寺七堂伽藍大成シ、仏殿ニ三如来ヲ安置ス」という『國郡一統志』の記載である。この一文を素直に理解すれば、先にも触れたように、素妙尼の招請によって「如来寺」が開かれた時に、七堂伽藍の整備と三如来像の安置がなされたことになる。このことから、現在、如来寺に安置されている本尊の三如来像の中で、「如来院」開創の際に安置されたのは釈迦如来像のみであり、他の二像は「如来寺」開創の際に新たに安置されたと考えることはできないだろうか。

これら三如来像に関して、阿弥陀如来像と薬師如来像は檜材を用いており、ほぼ同じ手法で造像されているのに対して、釈迦如来像は桜材を用いており、他の二像とは手法

にも違いが認められることが菊竹淳一氏や有木芳隆氏によって指摘されている⁽⁴³⁾。そこで両氏は、釈迦如来像がまず始めに中心的な仏師によって造られ、他の二像は他の仏師がそれにならうようにして作成したと推定している。ただし、菊竹氏は「釈迦像の製作とあまり間をおかずに」他の二像は製作された⁽⁴⁴⁾と論じ、有木氏はこの二像が先述した報恩寺の十一面観音菩薩像の作柄と極めて近い⁽⁴⁵⁾ため、これらの三像は同一の仏師たちによって造られたと考えた上で、十一面観音菩薩像の胎内銘に記されている「正元二年五月」という年月を参考にしながら、三像は釈迦如来像と「ほぼ同時期に（同年五月カ）造られた」と述べている⁽⁴⁶⁾。

しかし、如来寺の三如来像の螺髪に関して、釈迦如来像は一つひとつを植え付けているのに対して、他の二像は直接刻み出しているという大きな相違がある⁽⁴⁷⁾。もしも他の二像が釈迦如来像にならって数カ月以内に作成されたのであれば、二像の螺髪も釈迦如来像のそれと同じ手法で造られたのではないだろうか。また、最初から「如来院」に三如来像を安置する予定であったならば、釈迦如来像の胎内銘には「釈迦如来」のみではなく、三如来のすべての名前を

記すか、さもなくば、阿弥陀如来と薬師如来にもそれぞれ同様の胎内銘を記したのではないだろうか。正元二年に作成された「如来院」の釈迦如来像と報恩寺の十二面観音菩薩像に胎内銘があり、他の二像に胎内銘がないことは、後者の二像が正元二年から多少時間が経った後に製作された可能性を示唆しているように思われる。

さらに、ここで検討したいのが、薬師如来像の葉壺が後補であることから、当初は弥勒如来像として作成されたのではないかという指摘である。⁽⁴⁶⁾『國郡一統志』の「三日山如来禅寺」の項でも「文永六年、乃此寺ヲ建テ、七堂伽藍大成シ、釋迦・阿弥陀・弥勒ノ寶像ヲ塑ス⁽⁴⁷⁾」と記されているのだが、その場合、三如来はそれぞれ過去、現在、未来の三世仏に相当することになり、「義尹が当時の中国禅宗寺院にならって構想したもの」ということになる。⁽⁴⁸⁾そして、この指摘を支持する傍証となり得るのが、永平寺の仏殿の本尊である。

現在、永平寺の仏殿には釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒如来の三世仏が本尊として祀られている。ただし、浅見龍介氏によれば、釈迦如来像と弥勒如来像は十四世紀半ば頃の

〔熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）〕

作であり、阿弥陀如来像は平安時代末から鎌倉時代初期の作とみられるとのことである。その上で同氏は、これらの像は暦応三年（一三四〇）の永平寺の火災以降にあつらえられたものであり、「三世仏をそろえる際に、釈迦、弥勒を新しく造り、阿弥陀はどこから古像を持つて来たと考えることができよう」と述べている。⁽⁴⁹⁾では、この時、なぜ三世仏が仏殿の本尊に選ばれたのか。最も容易に想定し得るのは、火災以前の状態に復することを目指したという理由であろう。そして、この火災以前の本尊を考えると参照すべき事柄が、永平寺三世の義价の活躍である。

各資料によれば、義价は永平寺二世の懐葬からの委嘱を受けて、京都の建仁寺と東福寺、鎌倉の寿福寺と建長寺を視察した後、正元元年（一二五九）に入宋して各地の禅刹を歴訪した。そして、弘長二年（一二六二）に帰国すると永平寺の伽藍と規矩の整備に尽力した。この中の伽藍整備に関して、『永平寺三祖行業記』は「本寺ニ歸リ、山門ヲ建テ、両廓ヲ造リ、三尊ヲ安置シ、祖師三尊、土地五驅悉ク之ヲ造ル⁽⁵⁰⁾」と記している。ここに示された「三尊」が何を指しているかは定かでないが、それが祖師三尊や土地五驅

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

の前に記されていることから、一般に仏殿の本尊だと解釈されている。そして、この仏殿の本尊たる「三尊」は、現在の本尊にもとづいて推定すれば釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒如来の三世仏ということになるであろう。つまり、義价は入宋中の諸山歴訪の結果として、永平寺の仏殿の本尊に三世仏を構想したと考えることができるのである。

一方、もしも先述のとおり義尹が「如来院」開創の際には釈迦如来像のみを安置し、他の二像は「如来寺」開創の際に安置したとすると、彼が三世仏の構想を抱いたのは二回目の入宋中ということになるであろう。たしかに、義尹には二度にわたる入宋経験がある。しかし、一回目のそれは約一年という短期間であり、諸記録から窺われる訪問地も明州(浙江省)の天童山と大慈山教忠報国禅寺のみである。それに対して、彼の二回目の入宋は、義价の帰国直後から四年に及ぶものであり、その間に彼も各地の名刹を歴訪しようである。そうした中で、義尹も三世仏の構想を抱いたとしても不自然ではない。言い換えれば、ほぼ同時期に本尊を安置した永平寺と如来寺で、いずれも三世仏が祀られたとすれば、それは単なる偶然の所産ではなく、と

もに宋国の禅宗文化の導入を目指した義价と義尹の共通の結論だったと言うことができるのである。^{②③}

さて、以上の考察をまとめれば、義尹による如来寺の開創は、修寧尼の協力による正元二年以前の「如来院」開創と、義尹の二回目の入宋を経た後の、素妙尼の招請による文永六年の「如来寺」開創という二期にかけて考える必要があることになるだろう。釈迦如来像の胎内銘は、如来寺草創の由来に関して、文献上の記録以上の事柄を推理させるきっかけを提示しているように私には思われるのである。

三、二体の頂相彫刻の像主をめぐって

(一) 鉄山土安による如来寺の発展

如来寺には、初期の同寺に関わりがあったと思われる三人の頂相彫刻が残されており、それぞれ義尹と素妙尼、それに東州至遼の像だとされている。ところが、『國郡一統志』によれば、同書が著された十七世紀中頃の如来寺には、義尹の像の「左右ニ佛鑑和尚ト鉄山師ノ像ヲ安ズ」、つまり東州至遼と鉄山土安の像が安置されていたとされて

おり、『古今肥後見聞雜記』にも「開山寒巖之木像并二鉄山之木像□□之木像あり」と記されている。

改めて述べるまでもなく、現在の像主の推定に従えば、鉄山至安の像は存在しないはずである。一方、現在では素妙尼の像が存在することになっているが、十七世紀の記録にそのことは記されていない。この奇妙な事態を解消する方法は、極めて単純ではあるが、素妙尼像の像主を鉄山土安に訂正することであろう。

鉄山土安（一二四六—一三三六、以下「土安」と略す）は、大慈寺二世となる斯道紹由とともに長く義尹に師事し、義尹の法を嗣いだ後に如来寺二世となった。ただし、土安がいつ如来寺の住職になったのかは定かでない。義尹が大慈寺の住職を退いた後の正安二年（一三〇〇）に「如来寺住持義尹」と署名しているため、土安が正式に同寺の二世となったのは義尹の示寂後かもしれない。その後、正安三年（一三〇一）に斯道紹由が示寂すると、彼に嗣法の弟子がいなかったため、土安が大慈寺三世となった。また、筑後の檀越の招きで二尊寺を開いたが、まもなく大慈寺に戻ったようである。

〔熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）〕

土安は延元元年（建武三年、一三三六）二月十二日に示寂した。『日本洞上聯燈録』によれば、土安の示寂を察知した弟子の天菴懷義は師に別れを告げるため、その訃報が届く前に自らが開いた日輪寺から大慈寺に向けて出立したと記されている。この記載に従えば、土安は大慈寺で示寂したことになる。しかし、『國郡一統志』は、土安は「後二三日山ニ在リ」と記し、「師ノ全身ヲ如来寺龍華菴ニ葬ス」と記している。記録の成立場所やその順序から見ても、おそらく後者の方が正しいであろう。そうだとすると、土安も義尹と同様に、最期を如来寺で迎えている可能性が強い。義尹にとつて如来寺が初開の寺院で、それ故に思い入れの強い所であったのと同じように、土安にとつても如来寺は特別な意味をもつ寺院だったのでないだろうか。そのことを示唆するのが、『國郡一統志』の「三日山如来禅寺」の項に記録されている徳治二年（一三〇七）八月付の土安の上書である。少々長くなるが、その全文を読み下して引用しよう。

「当国者、九州之奥区ナリ。無依之辺境也。茲ニ因リテ、先師義尹長老、文永中（一二六四—一二七五）、

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

国中之靈場ヲ尋ネ、最初之禪院ヲ闢キ、叢林之軌範始メテ興行ス。別伝之宗旨、偏ニ流通シ、此ノ遠邦之利益ヲ思フ。超世之志願者ト謂フ可キ歟。三十余輩之僧侶雲水跡ヲ継ギ、五十年來之寒燠、香灯惟レ新タナリ。若シ随分之内徳有ラバ、蓋ゾ威權之外護ニ預カラシ。況ヤ是、領主北條修理亮殿後室御奉狀、既二分明也。御不審ニ及バザル歟。就中、当国大慈寺者、先師「義尹」長老、当寺建立以後之草創也。忝モ御教書ヲ預リ、御願寺ニ定メラレ了。一人建立之寺、何ゾ用捨有ル可キ哉。之ニ加フルニ、肥前高城寺・大光寺等、近年之間ニ各恩裁ヲ蒙リ畢。此皆九州之榜例也。余、州ニ於イテ者注進ノ不違。当寺独リ久容ニ漏レ尤モ以テ不便也。望ム所ハ別ニ委曲無シ。只、是レ甲乙人之狼藉ヲ為誡スル也。愁鬱多端ニ涉ラズ、只、是レ未來際之勤行ヲ為全スル也。然ラバ則チ早ク御願寺之御教書ヲ下サレ、弥一寺之龜鑑ヲ固メ、万年之鶴寿ヲ祈リ奉ラン。

ここでは最初に、如来寺こそが義尹の開いた「最初之禪院」であり、「叢林之軌範始メテ興行」した所であるこ

と、また、その後五十年にわたって香灯が護られていることが宣言されている。その上で、大慈寺は如来寺よりも後から開かれた寺院であるにもかかわらず、御教書を預かり、御願寺に定められている。義尹という一人の僧侶によつて開かれた二つの寺院の中で、一方は重「用」され、一方は見「捨」てられたかの如くである。さらに、肥前の高城寺や大光寺でさえも、近年に至つて恩裁を賜っている。そうした中で、如来寺だけが様々な恩恵から漏れているという事情を切々と訴えている。

大慈寺の住職でもある土安が、如来寺こそが義尹初開の寺院だとして、如来寺を大慈寺以上に大切に思っているかのような文面である。あるいは、斯道紹由が二世を継ぎ、その示寂の後に、いわば補欠のような形で第三世となった大慈寺よりも、自らが二世として直接、義尹の跡を護つた如来寺こそが、土安にとつては思い入れの強い寺院だったのであろうか。そうであればこそ、如来寺も大慈寺と同じように御願寺となることを願つたと考えることが可能である。そして、彼の上書の結果、徳治二年（一三〇七）十月には鎌倉幕府の命によつて如来寺は祈禱所とな

り、正和五年（一一三六）四月には先例にならって古保里郷の寺供田を認められた。さらに、土安の示寂後には室町幕府の庇護を受け、貞和三年（一一三七）に「肥後国利生塔」の通号を授かったことは先述のとおりである。⁶⁷

そうだとすれば、土安は義尹が大慈寺を開いて以来、相対的に重要性が低下していた如来寺の地位を復興させた中興の祖とも言うべき存在だったことになる。しかも、土安は先述のとおり、おそらくは如来寺で示寂し、その子院の龍華菴に葬られた。土安の示寂後にその頂相が如来寺、もしくは龍華菴に安置されることに何の不思議もないし、当時最盛期を迎えていた如来寺の勢いからすれば、頂相を作成することに不自由もなかったであろう。現在「素妙尼」像とされている頂相は、土安の跡を継いで如来寺三世となった東舟義勝が、師の土山に対する報恩行として作成した彼の頂相だったと考えるとよいのではないだろうか。

（二）東州至遼と如来寺の関係

如来寺に現存するもう一体の頂相彫刻は東州至遼（生没年不詳、以下「至遼」と略す）の像である。これは、先述

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

の『國郡一統志』の記述とも一致する。そして何よりも、像内の腹部に記されている以下の墨書銘が重要である。すなわち、「三日山如来禅寺北香室菴／遼東州佛鑑禅师／御影像 八月七日作始／十月初五日 開眼 誌／應永七年（庚辰）十月五日小弟比丘曾唯／□」の記載である。⁶⁸ したがって、この像が至遼のものであることは間違いない。

『日本洞上聯燈録』に記された至遼の伝記によれば、彼は大慈寺で土安の門に入り、そこで研鑽を積んだ後、永光寺の瑩山紹瑾や永平寺の義雲等に参じた。そして、再び土安のもとに戻ると、建武二年（一一三五）にその法を嗣いだ。さらに、延元元年（一一三六）に土山が示寂すると、「神亀山ヲ造り、茅ヲ縛リ以テ居」した。やがて、彼を慕う者が集まり、「漸ク梵刹ヲ成」した。これが「護真寺」であるという。その後、「衆ノ請ニ循ヒ大慈〔寺〕ニ住」した。その名声は遠く朝廷にも及び、しばしば招請されたけれども遂にそれに応ずることなく、晩年は「護真〔寺〕ニ退去シ示寂」した。朝廷は彼に「佛鑑禅师」の諡号を授けたとのことである。

ここで問題となるのは、このような生涯を送った至遼の

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

像が、なぜ如来寺に安置されているのかという点である。上述のとおり、彼は土安の法嗣であり、大慈寺十四世になつてゐるけれども、如来寺の住職世代には含まれていない。そのため、もともと至遼が如来寺三世であつたにもかかわらず、いづれも土安の弟子であつた「東舟義勝」と「東州至遼」とが混同されて、東舟義勝が如来寺三世と伝えられることになつた可能性も指摘されている。しかし、如来寺の世代は四世の浦帆遠から十世の竹隠閑まですべて東舟義勝の法系の者とされてお⁷¹り、師資相承の系譜からしてもそのような混同は考え難い。さらに、『國郡一統志』によれば、曆応三年（一三四〇）四月五日に如来寺の利生塔の修造が命じられた時、「時ノ嗣席者^は智勝禪師」だつたとのことである。しかし、如来寺の当時の世代に「智勝」という名前は見当たらない。如来寺二世の土安が延元元年（一三三六）に示寂していることを考えると、この「智勝」は東舟「義勝」の誤りと考えられる。そうだとすれば、やはり至遼が如来寺三世ということはありえない。⁷²

ここで、一つの手がかりとなりそうなのが、彼が開いた護真寺の存在である。しかし、この護真寺も肥後国内のど

こにあつたのか不明である。現在の熊本県内には八代市に「悟真寺」があるが、『國郡一統志』をはじめとする各種の記録によれば、同寺は延文年間（一三五六一—一三六一）の開創で、明峯素哲の法系に連なる能登国永禪寺四世大原孚芳を開山としてゐる。⁷³したがって、この寺を至遼が開いた「護真寺」とみなすことは難しい。ところが、『日本洞上聯燈録』に記された彼の伝記と頂相の墨書銘とを比較すると、そこに一つの矛盾点が浮かび上がってくる。すなわち、前者には「護真「寺」ニ退去シ示寂」と記されているのに対して、後者では「三日山如来禪寺北香室菴／遼東州佛鑑禪師」と記されているのである。

既に熊本県立美術館の展覧会図録で指摘されているように、頂相の墨書銘には至遼の示寂後に朝廷から下賜されたとされる「佛鑑禪師」という諡号が記されているため、この像は彼の示寂後に造られたと考えることも可能である。⁷⁴

しかし、墨書銘によれば、この像は応永七年（一四〇〇）八月七日に造り始め、十月五日に開眼し、銘文を記していることになる。一方、至遼の弟子の梅巖義東の伝記によれば、⁷⁵義東は応永七年九月十一日に至遼の室に入って法を

嗣ぎ、至遼の示寂後に護真寺を継いでいる。つまり、この伝記に誤りがないとすれば、至遼は頂相の造像が始められた八月にはまだ存命だったことになる。さらに、『大慈寺記』によれば、至遼の示寂日は十月二十二日のようである。⁷⁶ そうだとすると、諡号の下賜と頂相の開眼は彼の生前になされており、それを見届けた後に、彼は示寂したことになるのであろうか。

ただ、いずれにせよ、「三日山如来禅寺北香室菴」という墨書銘の記載は重要である。彼は如来寺の北に位置する子院の「香室菴」で晩年を過ごし、そこで示寂した可能性が強い。しかし、その場合、至遼は護真寺で示寂したという『國郡一統志』の記載との間で齟齬が生ずるのである。

そこで、この問題を解決するために、「香室菴」が後に「護真寺」と呼ばれることになったと考えることはできないだろうか。『國郡一統志』によれば、至遼は土山の示寂後に「茅ヲ縛リ以テ居」したという。一方、土山は上述のとおり、示寂後、如来寺龍華菴に葬られた。つまり、至遼は師の示寂後、その遺徳を偲ぶために如来寺の北に小さな庵を結んで留まり、後にそれが「梵刹」に発展して「神龜

山護真寺」となったと考えられるのである。そうだとすれば、大慈寺を退いた後に再び「香室菴」護真寺」に戻り、そこで示寂した至遼の頂相が、如来寺の子院である香室菴に祀られることは自然なことである。そして、時の流れの中で「香室菴」護真寺」が退転するに及び、頂相は如来寺に移されることになったのではないだろうか。

四、如来寺への憧憬

さて、本稿では如来寺に今も残る三体の頂相彫刻に導かれながら、その像主である三人の僧侶、すなわち同寺開山の寒巖義尹、二世の鉄山土安、それに東州至遼と如来寺とのそれぞれの関わりについて考察を行ってきた。十分な資料がないために、考察の多くは推測の域を出ないし、もしかしたら見当違いの議論となっているかもしれない。そもそも、「素妙尼」像の像主を土安に改めたり、至遼が開いたとされる「護真寺」を香室菴と同一視する点で、間違った仮定の上で考察を行っている可能性も否定できない。しかし、たとえそのような形であろうとも、わずかに残された手がかりをもとにして検討を行わない限り、義尹や

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

その弟子達にとつての如来寺の位置づけを理解することはできないだろう。たしかに、鎌倉幕府や室町幕府、あるいは在地の豪族達と如来寺との関わりについては、これまでも歴史学の立場から検討が加えられてきた。しかし、いわゆる寒巖派の中での如来寺の位置づけも、それとは別に存したのではないだろうか。

ここで振り返ってみれば、義尹も土山も如来寺で示寂し、至遼もここで示寂した可能性がある。大慈寺が義尹の在世中から勅願寺となり、彼の法系に連なる者達が順次その住職を務めることで寒巖派の活動の拠点となったのに対して、如来寺は義尹初開の寺院として、その法系に連なる初期の者達にとつては、いわば精神的な故郷のような位置づけを持っていたようにも感じられるのである。しかし、大慈寺が後に大きく発展した一方で、如来寺は衰退の一途をたどった。その背景には、こうした如来寺に対する愛着が、後世の者達の間で次第に失われたことも要因として指摘できるのであるか。如来寺はいま、地元の人々に守られて、往時の繁栄の名残をひっそりと伝えているのみである。

注

(一) 拙稿「寒巖義尹による宋文化の受容」『禅研究所紀要』四二(二〇一四)を参照されたい。ただし、本稿では、同拙稿に記した事柄と異なる結論に至った箇所も一部に存在する。なお、義尹の伝記類については同拙稿六一―六三頁注1を参照。本稿で義尹の伝記類に言及する際には、判別を容易にするために、同拙稿で各伝記に付した④から⑩の整理記号を伝記名(または伝記所収の書名)とともに記す。

(二) ④嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』(享保十二年(一七二七)、曹洞宗全書 史伝上)(曹洞宗全書刊行会編・発行、一九二九)所収) 卷第二(肥後州大梁山大慈寺寒巖義尹禅師)二四四頁、及び、同書(同上) 卷第二(肥後州大慈斯道紹由禅師)二四七頁による。また、江戸時代には山鹿市の日輪寺に伝来していたと思われる義尹の画像(現在、大慈寺所蔵)の自賛の末尾に「永仁(己亥)(一二九九) 季春月半日如来禅寺 義尹」とあり(井澤蟠龍『肥後地志略』(宝永六年(一七〇九)、肥後國地誌集)(森下功・松本寿三郎編、肥後国史料叢書第四卷、青潮社、一九八〇)所収) 七六頁)、また、大智が書写したとされる義尹の「仏祖正伝菩薩戒作法」(玉名市広福寺所蔵)に「正安二年(一三〇〇)(庚子)八月九日 如来寺住持義尹」と記されている(『第十一回熊本の美術展 寒巖派の歴史と美術』(熊本県立美術館

編・発行、一九八六）九五頁（図版解説六七）。

(3) 北嶋雪山『國郡一統志』（寛文九年（二六六九）、復刻、肥後国史料叢書第一巻、青潮社、一九七二）「三日山如来禪寺」三〇八一—三〇頁による。

(4) 松尾剛次『日本中世の禪と律』（吉川弘文館、二〇〇三）二〇六頁、宇土市史編纂委員会編『新宇土市史 通史編 第二巻 中世・近世』（宇土市、二〇〇七）二二—三六頁を参考にした。

(5) 『如来寺跡』（宇土半島基部古墳群分布調査報告（Ⅲ）・宇土市埋蔵文化財調査報告書第九集、宇土市教育委員会編・発行、一九八四）五九頁。ただし、応永七年（一四〇〇）には後述する東州至遼像が作成されており、応永十九年（一四一二）には、現在、如来寺旧地と現在地に分かれて残されている一対の小さな厨子型石造物が宝蔵によって寄進されている。また、文明十四年（一四八二）には如来寺旧地の大門付近に六地藏が立てられている。このように、一四〇〇年代にも如来寺がその命脈を保っていたことは確かである。しかし、その一方で、愛知県春日井市にある萬松山常安寺の本尊の釈迦如来像には、「応永年中（引用者注、一三九四—一四二八）当寺開基家藤原朝臣溝口候事二因て九州に下向す。其頃如来寺大に頽廢して如是の異像隨侍の僧なし。故に候永築錢百貫文を寄附し此如来を招請、即ち当寺の本尊と仰奉る」という伝承が伝わっており（尾州春日井郡豊場 萬松山常

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

安寺本尊略縁記）、『如来寺跡』（同上）所収、史料編一四—一五頁、句読点は引用者が付した）、如来寺が衰退の途上にあったことも事実であろう。

(6) 昭和二〇年七月一日以前に作成された「熊本県旧寺院台帳」の記載（下田曲水「大慈寺の寒巖義尹文書」所収、『熊本県文化財調査報告書』三、一九六二、一一〇頁）には、「永正元年竹隠和尚兵戦ノ患ヲ避ケ、如来寺を現在地に移転したと記されている。

(7) 『肥後國誌』下巻（後藤是山編、第二刷、青潮社、一九七二）三頁。なお、前掲の「熊本県旧寺院台帳」（注6参照、一一〇頁）には、「小西撰津守行長耶蘇教ヲ信ジ神社仏閣ヲ燒壞スルノ刻ニ其災ニ罹ル。時ノ任職虎山和尚潜ニ本尊等ヲ携テ山中ニ匿ス」と記されている。しかし、近年の研究によれば、小西行長による領国内の寺社の破壊は、キリスト教信仰によるものではなく、むしろ検地政策による寺社の既得権益の剥奪によるものだと考えられている（宇土市史編纂委員会編前掲書（注4参照）二九八頁）。

(8) 本尊の三如来像に関する主な論考として、高木恭二「如来寺仏像の胎内銘について」『宇土市史研究』一（一九八〇）、菊竹淳一「寒巖義尹像の周辺」『佛教藝術』二六六（一九八六）、有木芳隆「熊本市報恩寺の正元二年銘木造十二面観音菩薩立像について—曹洞宗・寒巖義尹禅師の造像活動—」『デアアルテ』一〇（一九九四）、有木芳隆「肥後・寒巖

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

義尹の造像活動について『美術史』四六(二)(一九九七)等が挙げられる。

(9) 大慈寺の頂相は総高一三七・四センチ、像高八二・八センチ。如来寺のそれは総高一二八・二センチ、像高八二・九センチである。以上、『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市)城南地区』資料篇(熊本県立美術館編・発行、一九八三)一一二頁、二四六頁による。

(10) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「三日山如来禅寺」三〇六頁(読み下しは引用者が行った。以下同じ)。

(11) 寺本直廉『古今肥後見聞雜記』(天明四年(一七八四)、『肥後國地誌集』(注2参照)所収)二五五頁。

(12) 『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市)城南地区』資料篇(注9参照)一一二頁、二四六頁。ただし、『第十一回熊本美術展 寒巖派の歴史と美術』(注2参照)六八頁(図版解説九)では、大慈寺の頂相の頭部は鎌倉時代末期の作と推定されている。

(13) 『第十一回熊本美術展 寒巖派の歴史と美術』(注2参照)六八頁(図版解説九)。

(14) 『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市)城南地区』資料篇(注9参照)二四六―二四七頁。

(15) 『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市)城南地区』資料篇(注9参照)二四五―二四六頁。

(16) 寺本直廉『古今肥後見聞雜記』(注11参照)二五五頁。

(17) 『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市)城南地区』資料篇(注9参照)二四五―二四六頁。

(18) この伽藍神像については、別稿を期したい。

(19) 銘文は高木前掲論文(注8参照)一一一―一三頁による。引用文中、斜線()は改行を示す。ただし、高木氏は「蜜」の部分に「密」と判読しているが、高木論文の掲載誌の口絵にある銘文の写真を見る限り、私には「蜜」と記されているように思われる。また、菊竹前掲論文(注8参照)三六頁や、有木前掲論文(一九九七、注8参照)一六〇頁等もそれを「蜜」と記している。

(20) 義尹の二回目の入宋年については、弘長三年(一二六三)とする記録と文永元年(一二六四)とする記録がある。詳しくは前掲拙稿(注1参照)六四頁注6を参照。

(21) 館隆志「寒巖義尹の伝記資料―寒巖尹和尚本伝を中心として―」『曹洞宗研究員研究紀要』三六(二〇〇六)五〇―五一頁による。

(22) ①撰者不詳『肥後州大慈寺開山寒巖禪師略伝』(成立年不詳、『曹洞宗全書 史伝下』(曹洞宗全書刊行会編・発行、一九三八)所収)二五九頁。読み下しは引用者が行った。

(23) ①北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「大梁山大慈寺」三〇頁。ただし、同書の「三日山如来禅寺」三〇五頁では、「寒巖尹和尚帰朝之後、素妙尼之請ニ因テ此郷ニ到リ、文永六年乃此寺ヲ建テ、七堂伽藍大成シ、釋迦・阿弥陀・弥勒

ノ寶像ヲ塑ス」とされている。

(24) 彼の伝記も同様の記載である。ただし、◎高泉性激『扶桑禅林僧宝伝』(延宝三年(一六七五)、『大日本仏教全書』第七〇卷(鈴木學術財団編、講談社、一九七二)所収)巻第二「大慈寺寒巖禅師伝」一四〇頁には、如来寺開創の記事そのものが存在しない。その他、『肥後地志略』(注2参照)七六頁にも同様の記載がある。

(25) 現在、熊本市中央区坪井にある徳輝山報恩寺は、『肥後國誌』上巻(後藤藤山編、第二刷、青潮社、一九七二)九八頁によれば、文永年間(一二六四―一二七五)に素妙尼が建立し、永正年間(一五〇四―一五二二)に古保里村から現在地に移された寺院であり、明治四二年の『熊本県社寺図録』に収められた寺伝(『如来寺跡』(注5参照)資料編一五頁)によれば、同寺は文永二年(一二六五)に開創し、永正元年(一二五〇)に移転した。また、そのかつての所在地に関して、『如来寺跡』(同上)五七頁は、如来寺の大門(惣門)があった辺り、すなわち、文明十四年(一四八二)の銘をもつ六地藏が現在も立っている付近であろうと推測している。この報恩寺に、「正元二年(一二六〇)〈庚申〉五月」の日付と、「如来院比丘義尹」、「比丘尼修寧」の名前を含む胎内銘をもつ十一面観音菩薩像が伝えられている(有木前掲論文(一九九四、注8参照)二五頁)。もしもこの観音像が当初から報恩寺に安置されていたとすれば、報恩寺の開創も正元二

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

年以前にさかのぼることになる。また、弘安十年(一二八七)の銘をもつ大慈寺の梵鐘に「報恩寺法位修惠等尼衆卅余人」(第十一回熊本の美術展 寒巖派の歴史と美術)(注2参照)七〇―七一頁(図版解説一三三)と記されていること等を根拠として、当初の報恩寺は尼僧寺であったとも推定されている。それ故、正元二年当時、「如来院」は男僧寺として義尹が住し、報恩寺は尼僧寺として修寧尼が住したと考えられることも可能である。もつとも、報恩寺の開創が『肥後國誌』に記された文永年間よりも前であり、しかも、この観音像が当初から報恩寺に安置されていた確証がない以上、これは憶測の域を出るものではない。

ところで、道元の伝記をまとめた『建撕記』の各種写本の中に、「三日山如来寺」の山号は、道元が宋から帰国して肥後国河尻に上陸した際に、大渡に「居住」し、そこに三日間この寺を建てたためであると「万民申し傳」えているという記載がある(河村孝道「諸本対校 永平開山道元禪師行状建撕記」大修館書店、一九七五、三二頁)。しかし、大渡に存するのは大慈寺であつて如来寺ではない。また、幾つかの写本は「三日山如来寺大慈寺」というように二つの寺名を併記した上で、上記の伝承を記している。このことは、撰者が当地のことを理解していないか、さもなければ、大渡と如来寺の地理的な不整合に気づいていた可能性を窺わせる。そこで、一つの可能性として、この三日間(または短期間)で寺

熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

を建てたという伝承は義尹の「如来院」開創に関わるものであり、それが道元の肥後国河尻への上陸の記憶と結び付き、道元による如来寺創建という伝承に変容したと考えることはできないであろうか。仮にそうだとすれば、義尹と修寧尼が開創した「如来院」は、当初は極めて簡素なものだったと考えた方が適切だということになるだろう。

- (26) この点に関して、高木前掲論文(注8参照)一三頁は、「文永六年の所伝も正しいとすれば、院から寺への昇格、あるいは独立したという意味で、開山が二度になったとみるべきであろうか」と述べている。また、松尾前掲書(注4参照)二〇四頁は、「如来寺は如来院が発展して、文永六(一二六九)年に寺号を、おそらくは朝廷から許可されたものと考えられる」と述べている。

(27) 高木前掲論文(注8参照)一三頁。

- (28) 例えば、宇土市史編纂委員会編前掲書(注4参照)一五三頁、二七二頁。

(29) 館隆志「曹洞宗最古の尼寺報恩寺と寒巖義尹―兀庵普寧と蘭溪道隆に参じた成道大師について―」『駒沢史学』六八(二〇〇七)三八頁。ただし、館氏はこの中の法位と成道が同一人物である可能性を指摘している。

(30) 高木前掲論文(注8参照)一三頁。

- (31) 『如来寺跡』(注5参照)六頁(高木恭二氏担当箇所)。あわせて同書四五頁も参照。

(32) 松尾前掲書(注4参照)二〇四―二〇五頁は「密壇尼」という語に関して、「密壇」とは密教で奥義を授ける儀礼である伝法灌頂を受けたことを示すとすれば、修行を積み、開山ともなれる女性の指導的な尼がいたことを示す事例であり、注目しておきたい」と述べている。

(33) 上田純一『九州中世禅宗史の研究』(文献出版、二〇〇〇)一七五頁。

(34) 上田前掲書(注33参照)一九一頁。

(35) 上田前掲書(注33参照)一九四頁。

(36) 有木前掲論文(一九九四、注8参照)二五―二八頁。

(37) 義尹が達磨宗と関わりをもっていたことは、彼の各種の伝記には触れられていない。しかし、種々の理由により、彼は達磨宗徒であったとの推測がなされている。この点について、例えば中尾良信『日本禅宗の伝説と歴史』(歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、二〇〇五)一八八―一九〇頁を参照。

(38) 道元の思想そのものに密教との親和性は含まれていた。この点については拙稿「禪と密教のあいだ―道元の立場から―」『宗学研究』四七(二〇〇五)を参照されたい。

(39) この場合、「蜜」と「密」、「壇」と「檀」の違いが気になるところである。しかし、漢字の使用に関して、かつては現在ほどの厳密さは求められていなかった。それ故、この点はそれほど問題視しなくてもよいであろう。

- (40) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「三日山如来禅寺」三〇六頁。この上書の全文は、注番号66の引用箇所を参照。
- (41) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「大梁山大慈寺」三〇頁。あわせて本稿注23を参照。
- (42) 菊竹前掲論文(注8参照)三六一―三八頁、有木前掲論文(一九九七、注8参照)一六〇―一六二頁。
- (43) 菊竹前掲論文(注8参照)三八頁。
- (44) 有木前掲論文(一九九七、注8参照)一六二頁。
- (45) 有木前掲論文(一九九四、注8参照)三二頁による。
- (46) 『第五回熊本的美術展 中世の美術』(熊本県立美術館編・発行、一九八〇)列品解説三五(頁記載なし)。
- (47) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「三日山如来禅寺」三〇五頁。
- (48) 『第五回熊本的美術展 中世の美術』(注46参照)列品解説三五(頁記載なし)。
- (49) 浅見龍介『調査報告』永平寺の中世彫刻』『MUSEUM―東京国立博物館研究誌―』六二九(二〇一〇)一五一―一六頁。
- (50) 撰者不詳『永平寺三祖行業記』(成立年不詳、『曹洞宗全書 史伝上』(曹洞宗全書刊行会編・発行、一九二九)所収)八頁。読み下しは引用者が行った。
- (51) 本稿注20を参照。
- (52) 佐藤秀孝「義介・義尹と入宋問題」『宗学研究』三二二(熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって(木村))
- (一九九〇)一五一―一五六頁を参考にした。
- (53) 義价や義尹に先立ち、正治元年(建久十年、一一九九)から建暦元年(承元五年、一二二一)まで宋国に滞在した俊苒律師は、京都泉涌寺を開くにあたり、承久二年(一二二〇)に「泉涌寺殿堂房寮色目」を定めている。その写本によれば、大仏殿の項に「右仏殿は、釈迦・弥陀・弥勒三世之教主を安置し、以って一寺崇仰之本尊となすなり、大唐の諸寺並皆かくのごとし」と記されており、同寺では今日も三世仏が本尊として仏殿に祀られている(赤松俊秀監修、総本山御寺泉涌寺編『泉涌寺史 資料篇』法蔵館、一九八四、三六二頁)。義价や義尹による三世仏安置の構想は、俊苒のそれと共通するものだったと言えるであろう。
- (54) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「三日山如来禅寺」三〇六頁。
- (55) 寺本直廉『古今肥後見聞雜記』(注11参照)二五五頁。
- (56) 当該の頂相を素妙尼像とみなす理由を地元の方々、並びに関係者に確認したが、よくわからないとの回答だった。また、像の内部と背面に墨書銘が認められるけれども、内部の銘文はほとんど判読できないようであり、背面のそれも像主を特定する手がかりとはならないようである。ちなみに、背面には「時之住持□□□□」と記されており、二番目の文字はニンベンのものである(第十一回熊本的美術展 寒巖派の歴史と美術』(注2参照)七三―七四頁(図版解説一

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

九）。おそらく、この像が造られた当時の住職の名前だと思われるが、『曹洞宗全書 大系譜一』（曹洞宗全書刊行会編・発行、一九七六）二五頁によれば、現在に伝わる如来寺の当時の住職の中で、二番目の文字にニンベンのおく者はいない。(57) 鉄山土安の伝記として、管見の限り次の四点（成立年代順）を挙げるができる。なお、下記の(A)④⑤の記号は、前掲拙稿（注1参照）六二一六三頁注1に示した義尹の伝記所収本に対応する。

(A)北嶋雪山『國郡一統志』（注3参照）「大梁山大慈寺」四八—五〇頁。

(D)卍元師蛮『延宝伝燈録』（延宝六年（一六七八）、『大日本仏教全書』第七〇巻（鈴木学術財団編 講談社、一九七二）所収）巻第七「肥後州大慈鐵山土安禪師」一八五頁。

(J)蔵山良機『重續日域洞上諸祖伝』（享保二年（一七一七）、『曹洞宗全書 史伝上』（曹洞宗全書刊行会編・発行、一九二九）所収）巻第一「大慈寺鐵山安禪師伝」一五—二頁。

(G)嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』（注2参照）巻第二「肥後州大慈鐵山土安禪師」二四七—二四八頁）。

(58) 本稿注2を参照。

(59) 『如来寺跡』（注5参照）四六頁は、「義尹が大慈寺に移って後には、おそらく後に大慈寺三世ともなる鉄山土安な

どの義尹の高弟達が残っていたと考えられる」と述べている。(60) 北嶋雪山『國郡一統志』（注3参照）「三日山如来禪寺」三〇六頁。

(61) 斯道紹由が示叙した後、豊後府内にある萬寿寺の僧慧（恵）文が大慈寺の住職に就こうとして朝廷に訴えた。そこで、鐘一声を鳴らした後に、先に詩偈を詠んだものを住職とするという勅命が下され、結果として土安が住職に就くことになったという。この出来事を、土安の各伝記、並びに『肥後國誌』上巻（注25参照）一九九頁が等しく伝えている。

(62) (G)嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』（注2参照）巻第二「肥後州大慈鐵山土安禪師」二四八頁による。

(63) (G)嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』（注2参照）巻第二「肥後州醫福山日輪寺天菴懷義禪師」二五三頁。

(64) 北嶋雪山『國郡一統志』（注3参照）「大梁山大慈寺」四九頁。

(65) 「教外別伝」。文字による經典以外の別の形で、仏法の真髓は伝えられるという禪宗の立場を表す。

(66) 北嶋雪山『國郡一統志』（注3参照）「三日山如来禪寺」三〇六—三〇八頁。「」内と（）内は引用者が付記した。

(67) 北嶋雪山『國郡一統志』（注3参照）「三日山如来禪寺」三〇八—三〇九頁より、該当箇所を、以下に読み下して引用する。なお、この部分は注番号66の引用箇所が続く部分である。「」内と（）内は引用者が付記した。

「同(徳治)二年(一一三〇七)辛未十月十六日、鎌倉公ノ命有り。陸奥守平朝臣・相模守平朝臣状ス。御祈禱所ト為シ、且ツ、甲乙人ノ乱入ヲ停止ス。花園院正和五年(一一三一六)丙辰四月二十三日、「鉄山」土安長老、先例二任セ古保里ノ寺供田ヲ領ス。正平三年(一一三四八)九月十八日、肥後守武光任武、国衙年貢ノ免状ヲ重ヌ。曆応三年(一一四〇)庚辰正月一日、左兵衛督源朝臣直義、肥後国如來寺ノ塔婆ニ仏舍利二粒(一粒東寺)ヲ安置ス。右、六十六州之寺社ニ於イテ、一国一基之塔婆ヲ建ツ。申請ヲ忝任シ、既ニ勅願ト為シ、仍テ東寺ノ仏舍利ヲ奉請シ、各之ヲ奉納ス。伏シテ冀クハ、皇祚悠久、衆心悦怡、仏法紹隆、利益平等。同三年(一一四〇)庚辰四月五日、院宣有リ。按察使経預執達ス。如來寺ノ塔婆ヲ勅願ト為シ、遂ニ修造之功、天下泰平ヲ祈ル者。時ノ嗣席者智勝禪師也。貞和三年(一一四七)丁亥八月五日、左兵衛督状ス。建武以來建立ノ諸国ノ寺塔ノ事。院宣案此ノ如シ。通号ヲ下サル所也。当寺ノ塔婆者、肥後国利生塔ヲ称サル可シ。貞和六年(一一三五〇)庚子正月二十五日、直冬ノ状有り。如來雜掌法泉利生塔、寺領ハ先例ニ任ス事。」

(68) 『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(二)(熊本市) 南区』資料篇(注9参照)二四七頁による。

(69) ①嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』(注2参照)卷第二、肥後州神龜山護真寺東洲至遼禪師」二五三頁。読み下しと

「熊本県宇土市如來寺に頂相が残る三師をめぐって(木村)

「」内の付記は引用者が行った。

(70) 『第十一回熊本の美術展 寒巖派の歴史と美術』(注2参照)七五頁(図版解説二二)。

(71) 『曹洞宗全書 大系譜一』(注56参照)二五頁による。

(72) あるいは、至遼も如來寺の住職となった時期があったかもしれない。けれども、寺院の住職世代(伽藍法)と師資の相承(入法)の一致を重視したため、東舟義勝の法系とは異なる至遼を住職世代に加えなかったか、後にそこから外した可能性も否定できない。

(73) 北嶋雪山『國郡一統志』(注3参照)「中宮山悟真禪寺」三二七―三二八頁、『肥後國誌』下巻(注7参照)三三二頁。

(74) 『第十一回熊本の美術展 寒巖派の歴史と美術』(注2参照)七五頁(図版解説二二)。

(75) ①嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』(注2参照)卷第三「肥後州海藏寺梅巖義東禪師」二六八頁。

(76) 小山正編『大慈寺記』(大慈寺記刊行会、一九六八)四二頁。ちなみに、至遼が土安から嗣法を受けたのは、本文中で述べたとおり建武二年(一一三三五)とされている。それ故、仮に嗣法が三十歳頃だとしても、至遼は世寿九十歳ほどだったことになる。

(77) 『曹洞宗全書 大系譜一』(注56参照)二五頁によれば、義尹の嗣法の弟子である斯道紹由、鉄山土安、愚谷常賢、仁叟浄熙が順次、大慈寺二世から五世を継ぎ、その後も斯道紹

（熊本県宇土市如来寺に頂相が残る三師をめぐって（木村）

由以外の三人の法系に連なる者たちが大慈寺の任職を務めている。また、例えば如来寺の三世、四世、五世はそれぞれ大慈寺の六世、十一世、十八世となっており、如来寺の任職に比べて、大慈寺の任職は短期間で交替していることが窺われる。